

「男、突っ走る！」

第16回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

有賀	門野	木内	木内
	賢哉	真保	雅也
勇	行哉	保	也
(48)	(17)(17)	(44)	(17)
中央高校生徒指導主任	中央高校2年2組生徒	雅也の母	中央高校2年2組生徒

1 中央高校・全景（朝）

2 同・廊下

雅也が難しい顔で登校してくる——康行が反対側から歩いてくる。

雅也「（康行を見て）おはよう、康行」

康行「おはよう。さっき、有賀先生が呼んでたよ」

雅也「有賀先生が？」

康行「うん。登校してきたら、生徒指導室に来てくれたって」

雅也「そう……分かった、ありがとう」

3 同・生徒指導室

有賀が仕事をしている——雅也が入ってくる。

雅也「失礼します。有賀先生、二年二組の木内です」

有賀「そこ座ってくれ」
雅也「はい」

雅也と有賀、向き合うように座る。

有賀「お前を呼んだのは、門野のことだ」

雅也「あの子が、何かやったんでしょか？

昨日生徒指導室に呼ばれたとき、僕は何故

彼が呼ばれたのか分からなくて」

有賀「木内は、門野と、この間やめた四組の

木本とは仲が良かったよな」

雅也「はい」

有賀「確か木本とは、お互いブログでも繋が

ってるよな」

雅也「ええ」

有賀「じゃあ、木本が最近書いたブログは読

んだか？」

雅也「ええ。それは僕も気になって、門野に

も相談したんです。ある人を特定していな

いとはいえ、あんな誹謗中傷になるような

ことを書いてしまうのはまずいのではない

かと」

有賀「そっか」

雅也「なので、何故門野が呼ばれたのかと思

って……昨日はずっと生徒指導室に行った
きりで、昨日から連絡も取れなくて」

有賀「門野の携帯は、生徒指導部で預かって
るからだ」

雅也「どうしてですか？」

有賀「門野も、木本と同罪だからだ」

雅也「え……？」

有賀「門野は、木本の書いたブログのコメントに、木本に賛同するようなことを書いたんだ。『確かに俺もそう思う。ロクな女はいないよな』って」

雅也「……」

有賀「それに門野、まだ無断バイトしてるだろ。それに、ギャンブルだって」

雅也「……」

有賀「ただでさえ高校生が競艇場に行くなどもつての外だって言うのに、あいつ舟券買ってるんだろ。賭け事は立派な規則違反だ。それに去年同様、無断バイトだってしてるって話も聞いている。お前、知ってたんじゃないや」

ないのか」

雅也「それは……」

有賀「まあ、友達を売りたいくないっていう気持ちは分からなくはないが、学校の規則を破ってるだ。本来だったら、そういうことを発見次第、生徒指導室に報告してくれると助かるんだが」

雅也「（険しい顔で）先生のおっしゃることは、ごもつともです。正直、無断バイトもギャンブルも、全て僕は知っていました。でも門野は、入学してすぐに、向こうから声をかけてきてくれて、高校に入ってできた最初の友達なんです。昨年とほぼ変わらないクラスですが、その中でも門野は僕にとって大事な友達なんです。なので、状況を全て知っていても、生徒指導部への報告なんて、できませんでした」

有賀「……」

雅也「せっかくできた友達です。もし、生徒指導部に報告なんてしたら、間違いなく僕

たちの関係性は崩れます。僕は、それを崩したくはありませんでした。バレずに、事が上手く進めば、それに越したことはない
と……そう思っていました」

有賀「学校の規則を破っている者を目の当たりにして、何も思わなかったのか？」

雅也「葛藤はありました。バイトだって賭け事だって、それにタバコだって……これら全て、学校の規則違反だってことぐらい、小学生でも分かります。バイトのことだって、ちゃんと生徒指導部に届け出を出すように促しましたし、タバコも競艇もできればやめてほしいって思いました。でもそれを言ったところで素直に直すような奴じゃないってことは分かっていたから、バレない程度にコッソリやってくれて思いました。でも、先生は全てを知ってたんですね」

有賀「バイトのことは、薄々感じてはいた。競艇のことだって、門野と思わしきブログ

を見つけたから、おそらく賭けているだろうとは思っていたが……木本が、ブログの件で事情を聞こうと思って連絡したとき、全部話してくれた」

雅也「きのしゅん……木本が、有賀先生に伝えたんですか？」

有賀「あいつら、同じバイト先らしいじゃないか」

雅也「……」

有賀「木本を恨むことはお門違いだぞ。まあ、木本だってブログで騒がせたんだ。あいつらは同罪だ」

雅也「……門野は、どうなるんですか？」

有賀「一応、今回は無断バイトとギャンブルの事も含めての謹慎ということにしてるが、あいつ昨日、高校を辞めるって言ってたぞ」

雅也「え……」

有賀「まあ、携帯は生徒指導部で預かってるから、まだ本人から木内の耳に入っていないのは当たり前か」

雅也「……」

有賀「学級代表や生徒会選挙の出馬、コンピ
ュータ部の副部長……お前ほど真面目に学
校生活を送ってる奴が、こういう輩と関わ
るとロクなことないかもしれないぞ。お前
の評判だって悪くなりかねない。余計なお
世話かもしれないが、友達付き合いは考え
たほうが良いな」

雅也「……」

4 同・廊下

雅也が深刻そうに、生徒指導室から出
てくる。

雅也「失礼しました」

険しい顔で歩いていく雅也。

N「携帯電話を没収されていたため、しばらく
くかどけんとは連絡が取れない状態が続き
ていました」

5 木内家・全景（夜）

N 「そして、一週間が経過したある日のこと
……」

6 同・雅也の部屋

雅也が宿題をしている——携帯電話に着信がかかってくる。賢哉からである。

雅也、慌てて電話に出ると、

雅也「もしもし！ かどけん」

賢哉の声「どうしたんだよ。そんなデカイ声
で」

雅也「だって……一週間も連絡なくて、急に

電話かかってきたからびっくりして」

賢哉の声「まあ、有賀に携帯没収されてたからな」

雅也「そうだよね……この間、有賀先生に呼ばれて、いろいろ聞かれたわ」

7 門野家・賢哉の部屋

賢哉が携帯電話で話している。

賢哉「やっぱりお前にも事情聴取したのか。」

相変わらず、生徒指導部は謹慎になった奴の周囲から事情を聴いてつるし上げていくの好きだよな」

雅也の声「それよりも、謹慎になったんですよ。また課題終わったら、復帰できるんですよ」

賢哉「それなんだけどさ……俺、学校辞めるよ」

8 木内家・雅也の部屋

雅也「何で……。 (と混乱して) ちょっと待ってよ、慌てずによく考え直してよ。せつかく入った高校じゃない」

9 門野家・賢哉の部屋

賢哉「決めてたんだよ。もう一回謹慎になったら、学校辞めるって」

10 木内家・雅也の部屋

雅也「そんなこと、決める必要なんてない。」

それに、辞めた後どうするの？ 中卒で雇
ってくれるところでも探すの？」

賢哉の声「まあ、それも良いんじゃないかな。
今は別に学歴社会じゃない。中卒でも高卒
でも働けるとこさえあれば良いし、今のバ
イト先でしばらく働いても良いと思ってる」

雅也「本当にそれで良いの？」

賢哉の声「別に高校辞めたところで、どうつ
てことないさ」

雅也「俺にとっては、どうってことじゃない
の。かどけんには、辞めてほしくない。こ
のまま、一緒に俺たちと卒業してほしい」

11 門野家・賢哉の部屋

賢哉「お前がそう思ってくれるのは嬉しいよ。
でも、俺はもうこんな学校に未練なんてね
えんだ。学校辞めれば、バイトだって自由
にできるし、競艇だって誰からも文句言わ
れずにできる。こんな解放感ないだろ」

雅也の声「馬鹿だよ……かどけんは」

賢哉「（笑って）ああ、馬鹿で良いさ。それが俺なんだから」

雅也の声「そういうことじゃなくてさ……」

賢哉「まあ、この学校に入って、木内や清水、そーびや松田、別の中学校の奴と出会えたことは大きかったよ」

雅也の声「だったら……」

賢哉「別に会おうと思えば、いつだって会えるんだ。辞めただけで、一生会えなくなるわけじゃないんだしさ」

12 木内家・雅也の部屋

雅也「かどけん、全然分かってないよ……。会えるとか会えないとかじゃないの。一緒に高校に入学した仲だからこそ、一緒に卒業証書ももらいたいってことなの。今辞めたら、クラスでのかどけんの存在はなくなっちゃうんだよ。来年になったら、かどけんの席がないんだよ。卒業アルバムにも載らないんだよ。この学校にいた門野賢哉の

存在が、全部なかったことになっちゃうんだよ。かどけんは、それでも良いの？」

13 門野家・賢哉の部屋

賢哉「俺は何とも思っちゃいない。逆に、そこまで考えてくれてありがとな」

雅也の声「だったら、残り半分の高校生活、一緒に過ごそうよ。解放感とかなんて言わずに、せめてあと一年半我慢すれば、自由になれるんだから」

賢哉「（苦笑して）そんなに待てねえな。俺たちにとっての一年半はデカイから」

雅也の声「呑気なこと言って……」

賢哉「しようがねえだろ。もう決めたことなんだから」

雅也の声「今からでも遅くない。ちゃんと悪いことを謝って、謹慎の課題終えれば、また一緒に学校生活送れるんだから」

賢哉「もう良いよ、決めたことなんだから」
雅也の声「かどけん、もう強がらないで……」

「本当の事言って」

賢哉「（考え込み）……お前以外にも、仲の良い友達がたくさんいる。みんなと一緒に卒業したかったさ」

雅也の声「だったら……」

賢哉「でも……もう、あの学校にはいられない」

雅也の声「ブログにあんなコメント書かなければ、こんなことにはならなかったでしょ」

賢哉「お前、きのしゅんのこと恨んでるだろ」

雅也の声「……うん。でも、有賀先生から言われた。木本を恨むのは違うって」

賢哉「そりやそうだろ。別にあいつが悪いわけじゃないんだから」

雅也の声「けど、何も辞めなくたって」

賢哉「一緒に卒業はしたいけど、この学校の厳しい掟に縛られてたら、とてもじゃないけど残りの学校生活、楽しめないと思う。あれもダメ、これもダメっていう制限ばかりで、どんな楽しい生活が送れるって言

うんだよ」

14 木内家・雅也の部屋

雅也「……」

賢哉の声「なあ、木内」

雅也「何……？」

賢哉の声「お前、また生徒会選挙に立候補して
てみるよ」

雅也「え？」

賢哉の声「あの六票差で悔しくて、まだ未練
があるんじゃないのか」

雅也「……」

15 門野家・賢哉の部屋

賢哉「俺は辞めるけど、俺の分まで学校生活
楽しんでくれよ。来年、ちゃんと選挙に当
選してくれ。それが、俺との約束だと思っ
てさ」

雅也の声「かどけん……」

賢哉「この一年半、木内には世話になった。

これまでお前みたいなキャラの奴には出会ったことなかったから、すごく新鮮だったし、楽しかった」

16 木内家・雅也の部屋

雅也「……」

17 門野家・賢哉の部屋

賢哉「またみんなで飯でも行こう。じゃあな」と、電話を切る。

18 木内家・雅也の部屋

電話が切れ、携帯電話を呆然と見つめる雅也。

涙がこみあげてきて、机に顔を伏せる。いつまでも泣いている雅也——と、ドアが開き、真保が入ってくる。

真保「（驚いて）どうしたのよ……何があったの」

雅也「（鼻をすすりながら）かどけんが……」

かどけんが、学校辞めるって……」

真保「……」

雅也「大馬鹿者だよ、あいつは……」

やり切れないように見つめる真保。

19 中央高校・全景（数日後・朝）

20 同・廊下

雅也が歩いている——生徒指導室から
有賀が出てくる。雅也、一瞬立ち止ま
り、

雅也「おはようございます」

有賀「おはよう」

雅也、歩いていく。

有賀「（言い聞かせるように）昨日」

雅也、足を止め、有賀の方へ振り返る。

有賀「門野から、退学届が提出されたよ」

雅也「……そうですか」

有賀「お前、最後まで思いとどまるように説
得したらしいじゃないか」

雅也「当たり前前じゃありませんか……大事な友達に、学校をやめてほしくなかったんですから」

有賀「まあ、木内の努力は認めるよ。でも、あまり問題児がとどまっても、どうしようもないんだ。学校の風紀が乱れて、この学校の評判にも関わるからな」

雅也「……」

有賀「去る者は追わずだ。辞めたいっていう奴を無理に止める必要もないだろ。かえって止められるほうが、辛いかもしれないぞ」

雅也「……どう言われようが、門野は僕にとっては大切な友達ですから」

と、軽く有賀に会釈をすると、去っていく。

21 同・男子トイレ

雅也が個室用便器でしゃがみこんでいる——嗚咽と吐き気に襲われ、顔色が悪くなっている。と、出てくると康行

が手を洗っている。

康行「大丈夫か？ 顔色悪いぞ」

雅也「そう？ 大丈夫だよ」

康行「もしかして、かどけんのこと」

雅也「（康行を睨むように）……」

康行「ごめん……」

雅也「いや……こっちこそ」

康行「よく一緒にいたもんね。こういう時、

どう声かけて良いか分からないけどさ」

雅也「変に気は遣わなくて大丈夫だから。勝手に友達のことを思って、勝手に凹んでる

痛々しい奴だから」

康行「そんなこと……」

雅也「今更俺がこんな風になったところで、

かどけんが復帰するわけじゃないってこと

ぐらい、分かってるんだけど……」

康行「退学届、出したんだっけ？」

雅也「昨日、生徒指導部で受理したんだって」

康行「そっか……」

雅也「生徒指導部って、血も涙もないところ

だよ。去る者追わずなんだもの。少しは引き留めてくれても良いだろうに。結局、学校の対面のこともあるんでしょ。悪さをする生徒は容赦なく切り捨てていく。そういうところなんだよ」

康行「……」

雅也「俺、これから何を楽しみに学校に来れば良いんだろうね。毎日かどけんと顔合わせで、くだらない、他愛もないおしゃべりをするのが日課だったのに……」

康行「かどけん以外にも、たくさん話せる友達はあるけど、その中でもかどけんは特別な存在だったんだよ」

雅也「うん……だからこそ、余計に辛い。多分、かどけんに限らずだと思う。俺の周りの大事な友達が、いきなり学校を辞めたらとても冷静にはいられない」

康行「……かどけんの代わりにはならないかもしれないけど、俺やかっちゃん、良樹だっているんだ」

雅也「……」

康行「木内は、一人じゃないんだから」

雅也「康行……」

康行「今は一旦冷静になって、平常心取り戻して、いつも通りの木内になってよ。そんな顔色悪かったら、クラスの雰囲気だって悪くなっちゃうだろ」

雅也「……そうだね、ありがとう」

微笑んで頷く康行。

N「この時の康行の存在に僕は救われました。かどけんがいなくなったことによる虚無感
は凄まじいものでしたが、クラスメイトの顔を思い浮かべたとき、少し僕の気持ちは落ち着いていたのでした」

つづく